とどけ夢 未来へ
-DREAMING-

原田 桃花（ももか） さん

●多田小学校６年

看護師になりたい

私が、将来なりたい職業は看護師です。

幼稚園生のころから、人を助ける仕事がしたいと思っていました。病院に行くといつも笑顔で優しく接してくれる看護師さんを見て、私も看護師になりたいと思うようになりました。看護師は人の命を預かる仕事なので責任重大です。たくさんの人たちの助けができるようになりたいと思っています。

そのために今は、一生けん命に勉強に励み、夢を実現できるように努力していきたいです。

みんなの広場

佐野ブランドキャラクター
さのまる

市長からのメッセージ

あけましておめでとうございます。

市民の皆様には、輝かしい新春を健やかにお迎えのこととお慶び申し上げます。

昨年は、行政運営の要であり市民の皆さんの生命・財産を守る防災拠点となる新庁舎が完成いたしました。約４年間、分散した仮庁舎での執務ということで、市民の皆さんには大変ご不便をおかけしました。ようやく「質の高い市民サービスを提供できる、コンパクトで環境に配慮した安全・安心な総合庁舎」が完成しました。

これから新庁舎完成を契機とし、皆さんと一体となって「佐野らしさ」を活かした活力あるまちづくりを進めてまいります。「市民の皆様のための庁舎」ですので、気軽に足を運んでいただきたいと思います。

また、９月には第２次訪英団として英国を訪問しました。現地の名門クリケットクラブと友好交流と協力支援の約束を取り交わすとともに、経済関係団体者同士の交流も行われました。今後の海外展開や外国人観光客の誘客など、いわゆる「インバウンド」に向けた基礎を築くことができました。

さて、今年は佐野市まち・ひと・しごと創生総合戦略が本格的に動き始めます。本市の高速交通の利便性を活かし、企業誘致や新しい産業の創出など「しごとづくり」を進めるほか、「さのまる」を先頭に国内外に向けたシティプロモーションの充実を図り「新しい人の流れ」を創造してまいります。

今年は申年です。「申」という字には、真っ直ぐに伸びると言う意味があります。本市も「北関東の新中核的都市」を目指し、ますます成長する年にしてまいりたいと考えております。今後とも市民の皆さんのご支援ご協力をよろしくお願い申し上げます。

岡部 正英

今回の表紙　「第１１回さのマラソン大会」（佐野市陸上競技場ほか）１２月１３日（日）

第１１回の開催となる、さのマラソン大会が行われました。

今年はフルマラソンに１，８９１人がエントリーし、１，６９０人が完走。

小雨が降るあいにくの天気の中、沿道の声援とボランティアの皆さんに支えられながら、約９割の方が完走しました。

橋本 大定さん
（市民病院院長）

キラリ★話題の「ひと」

○プロフィール
昭和19年、旧満州生まれ。
東大医学部卒。医学博士。東大第2外科専任講師、東京警察病院外科部長、埼玉医科大総合医療センター外科教授など経て、平成26年4月1日付で佐野市民病院院長に就任。
著書「おなかを切ってしまう前に読む本」など。

女性医師を中心に地域医療の拠点病院を目指す！

「父は長春医科大学で、ラストエンペラー・愛新覚羅溥儀の主治医でした」という橋本医師は、佐野市民病院を奇跡の復活をさせた福光前院長と大学時代のボート仲間だったご縁で、佐野に赴任することになったそうです。

医師にとって最も難しい手術領域である肝臓・胆嚢・膵臓外科の権威でもある橋本医師は『消化器外科のブラックジャック』と呼ばれています。このことについて橋本医師は、「いわゆる〝神の手〟と言われる人は、数人の〝神の手〟の恩師の真似を重ねた、いわば『模倣の達人』であり、その過程で人を助けるために何に気づけるかが重要なんです」と話します。

1987年、ヨーロッパから世界の医学会が大きく動き、患者の侵襲（ダメージ）を少なくするため腹部を大きく切る手術から、穴をあける腹腔鏡手術へと移りガスを充填する気腹法が広まりましたが、橋本医師はその手法に大きな疑問を持ち、さらなる低侵襲法を模索し、実験を繰り返し、より安全・安心な『腹壁吊り上げ法による腹腔鏡手術』を開発しました。この方法は海外でも高く評価され、現在まで死亡例ゼロだそうです。それにも関わらず、橋本医師はさらに低リスクを求め、医療メーカーや町工場などを巡り手術器具などの開発もしています。

今後目指す佐野市民病院像を伺うと、「佐野に5カ所ある僻地診療所と連携し、地域医療の拠点病院にし、また男女共同参画を進め、消化器科医長の女性医師（市出身者）を中心に、女性の目線を取り入れた特色ある病院にしていきたい」と言います。

休日は日本地図を広げ、何カ月もかけ千葉から静岡あたりの海岸や河川沿いをご夫婦でウォーキングするそうです。「佐野で時間がある時は、車に積んである運動着に着替え唐沢山を歩くのです。最近〝ヤマ友〟になったナベちゃんという友人から、唐沢に生息する鳥や植物のことなどを教わっています。唐沢はいい山ですね」とにこやかに語る橋本医師はすっかり「佐野人」です。

（市民記者・永倉文子）

佐野弁 ばんだい

ほおじろの鳴き声を聞いて楽しんだ

ほおじろは秋から冬にかけて、雑木林や農耕地などにすみ、雑草の種子や昆虫などをあさりながら枝から枝へ、枝から地面へと飛び回ります。すずめほどの大きさで、からだはほぼ茶褐色。ほお（頬）が白いことからほおじろと呼ばれています。ほおじろの地鳴き（平常の鳴き方）は、チチッ、チチッ、あるいはチッ、チッと短く細い声で鳴きます。雄は繁殖期をむかえると、しきりにさえずります。ただ、ほおじろは同じさえずり方はしない習性があるので、うぐいすのホーホケキョのように、鳴き声に一定の型がないのが特徴です。

ほおじろのさえずる声を鳥類図鑑で調べると、チッピピッツチー、チョチョッスッチョホイ・チョチョッスチョホイッ・チョッチョッスチョホイツケ・チョッピーチリーチョ…のようにいろいろです。ほおじろにはチー、チョ、ピ、ホイという声が聞かれます。連続的にそしてリズミカルに発するこの声に心をひかれた昔の人は、ほおじろを飼ってその声を楽しみました。耳をすまして聞いていると、雄鳥は、「イッピツケージョーツカマツリソロ」（一筆啓上仕り候）とさえずったといいます。ほおじろの鳴き声に、不思議な魅力を感じていたことがわかります。鳴き声が「シトト」と聞こえたというので、シトトというようになったと昔の本に書いてあります。今でも方言で、ほおじろをシトト、あるいはヒトト、ストトなどといっています。

（市民記者　森下喜一）